

第 20 回 ARG WI2 研究会 学生報告

2024 年 12 月 1 日, 2 日, 3 日

1. はじめに

2024 年 12 月 1 日(日), 2 日(月), 3 日(火)に, 唐津商工会館貸会議室にて, 第 20 回 ARG WI2(Web インテリジェンスとインタラクション)研究会が開催された. 本研究会の参加登録者は 63 名である. 本報告では, ARG WI2 研究会の概要について述べ, 各セッションの中から筆者が特に興味深いと感じたものをいくつか紹介する.

2. ARG WI2 研究会 概要

今回の ARG WI2 研究会では, 11 件のショート発表(発表 13 分・質問 5 分)および 17 件のロング発表(発表 20 分・質問 10 分)が 8 つのセッションにわけて行われた. 加えて, 技術報告セッションが行われた. 各セッション名は以下に示す通りである.

セッション 1 意思決定支援・言語処理

セッション 2 SNS・情報推薦

セッション 3 LLM(1)

セッション 4 情報推薦

セッション 5 LLM(2)

セッション 6 LLM(3)

セッション 7 レビュー解析・分析

セッション 8 データ解析・分析

3. 一般講演

一般講演では LLM や情報推薦といった分野を中心に発表があり, その中で筆者が特に興味深いと感じたものをいくつか紹介する.

嶋津 瑛氏(工学院大学)らによる「大規模言語

モデルを用いた複数チャットエージェントによるチャットコミュニティシミュレーション」では, ユーザ間のやり取りをシミュレーションし, 交流の模倣・予測を行うシステムの提案と, 実際にシミュレーションした結果について報告された. LLM でユーザペルソナを生成し, ユーザペルソナ同士で会話させるという取り組みに興味を惹かれた. また, 提案したシステムがなぜ必要であるかという質疑に対して, 新製品などを出すときにそれについての反応がどうなるかの予測をする必要があるためと回答していた. これに関して, ユーザペルソナの設定として交流目的の内容に関する知識を持ったユーザペルソナしか生成していなかった部分に疑問を感じた. 新商品を出す際に, それに関する知識を持つユーザだけが投稿に対して反応するとは限らず, むしろ知識を持たない新規のユーザがどのような反応をするのかといったところのところが, 企業側からすると気になる点になるのではないかと考える. 発表者らが想定しているようなシステムの使用方法和, システムの構築内容(ユーザペルソナに関してやルール, 交流目的を設けることなど)とが少しずれているように感じた.

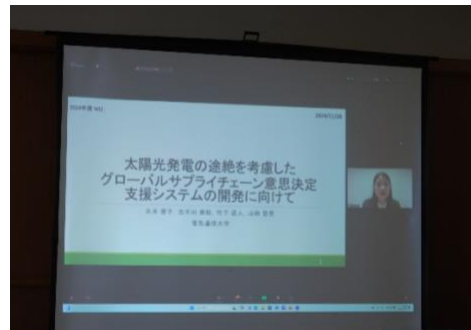


図 1 : 1 日目一般講演の様子. 1 日目は Zoom での開催
池町 和史氏(関西大学)らによる「レビュー文
に対する係り受け解析を用いたビデオゲームにおけ

るプレイヤーの着目点の分析」では、ゲームのレビュー文からプレイヤーが作品を評価する際の着目点と評価内容を抽出し、作品評価の傾向の分析を行ったことについて報告された。プレイヤーがおもしろさを評価するには、どのジャンルにおいても共通する要素があり、そのうえでジャンルごとに違った要素があるということがデータとして可視化されたのは非常に興味深かった。質疑応答では、発売日による着目点の推移分析を行った際に年代を5年ごとに区切っていたことに対して、ゲームは年代ごとのハードウェアで区切った方がよいのではないかという意見や、レビューに日付が記載されていないため、現代の人々による評価と当時の評価を切り分けて分析することができない点が惜しまれるという意見が挙げられた。今後、これらの課題が改善されれば、さらなる発展が期待でき、学生奨励賞を受けた。



図2：学生奨励賞 池町氏の発表の様子

川本唯人氏（工学院大学）らによる「大規模言語モデルを用いた検索結果の欠損トピックの可視化とその評価」では、Web 検索において不足している情報を大規模言語モデルを用いて可視化する手法が提案された。本研究は、大規模言語モデルを使った検索支援の新しい方法を提案している。従来の検索では見落とされがちな情報（欠損トピック）を自動で探し出し、URL の比較でそれらの情報の有無を判定する手法を開発した。100 名の被験者実験で、従来方法より役立つ Web ページを多く見つけられ、検索ワードの入力も増えることが分かった。ただし、いくつかの課題もあると考えられる。実験での「役立つ Web ページ」の判断が主観的であることや、

検索ワードから生成するトピック数を 10 個に固定したため、検索ワードの具体性によってトピック数のバランスが変わってしまう問題がある。また、一般的な検索ワードとの比較データがないことや、この方法が実際に役立った具体例の分析が不十分な点も改善の余地がある。これらの課題は今後の研究発展の可能性を示すものでもある。検索ワードに応じてトピック数を調整することや、具体的な分析を加えることで、さらなる改善が期待でき、学生奨励賞を受けた。

大木有氏（立正大学）らによる「ソーシャルメディア上での情報収集が研究成果に与える影響の分析」は、研究者の Twitter 利用と研究成果の関係について約 40 万人規模の大規模なデータ分析を行っている。これまでの研究は特定の地域や分野に限られていたが、この研究では OpenAlex と Twitter のデータを組み合わせて幅広い分析を行った。分析の結果、研究者は自分と似た研究をしている人をフォローする傾向があり、Twitter 上で積極的に情報を集めている研究者は論文の引用が増えやすいことが分かった。特に、フォロワー数よりもフォロー数の方が引用増加に効果があることから、情報発信より情報収集が重要だと考えられる。しかし、いくつか問題点もあると感じた。2017 年のフォロー関係と 2017-2020 年の引用数の関係が本当に原因と結果になっているのか十分な証明ができていない点や、アカウント作成日からフォロー関係の時間的な流れを推測する方法が適切かどうかの確認が必要な点、Twitter だけしか調べていない点などである。また、研究分野による違いなどもっと詳しく調べる必要がある。ただし、この研究は研究活動での SNS の役割、特に情報収集の重要性について新しい発見を示しており、今後の発展が期待でき、萌芽研究賞を受けた。



図3：萌芽研究賞受賞者 大木氏の発表の様子

4. 懇親会

会場の唐津市は三大朝市と呼ばれる呼子朝市があり絶好のロケーションであったことから、今回の懇親会は唐津市の料理店において行われた。新鮮なイカの刺身や天ぷらを肴に学生や先生の間で活発な意見交換などで大いに盛り上がった。



図4：懇親会の様子

5. おわりに

今回の研究会は3日間にわたり、多くの発表を聞くことができた。各発表の議論では筆者の研究でも考えなければならないことなどが議論されており、今後の研究活動の参考になった。とても貴重な機会であった。

秋山 明日香（関西大学）

橘 輝虎（関西大学）